

打ち返せない

大松 達知

野球の比喩はこのごろ伝わらないのだ、というネット記事を目にした。とくに会社勤めのオジサン世代が不用意に使うと、部下との精神的断絶を広げるらしい。

「きのうのプレゼンはポテンヒットだったな」とか、「きみは顧客の選球眼がいいねえ」なんて言っても若手には通じないようだ。

とはいえ、近作でも、

母の言う「じゅうぶん生きた、死にたい」はデッドボールで打ち返せない 俵万智『アボカドの種』

夏空のギンガムチェック九回裏二死満塁からみな立ち上がる 北山あさひ『ヒューマン・ライツ』

はつなつの北山投手はサヨナラの3ランホームラン打たれたり

など、短歌では使われることはある。俵の〈デッドボール〉は不思議な和製英語（英語ではヒット・バイ・ピッチ、投球にぶつけられた、という）。ケムに巻く感じが巧い。

北山の一首目は状況がよくわからないけれど、豪快さ強引さは爽快。いかにもキタヤマ調で良い。二首目の悔しさと絶望感はわかる気がする。そう。このくらのレベルの比喩はまだまだ通じるのだらう。（サヨナラホームランは微妙かなあ。そもそも野球のルールはかなり複雑なのに、それなりに浸透している方が驚きかもしれない。）

一方、私は「今日の批評のトップバッターは北原さんです」とか「正岡さんの代打で司会を担当します」のように使われると、その陳腐さに耐えられない。常套句を避けたくなる、歌人の病かもしれない。全力投球とか全員野球とか続投とか空振りとか。大切な用語をそんな安易に使わないでよね、という気持ちもある。

だからといって、「その句またがり回転数が多いスプリットみたいにキレますね」とか「下句がバスター気味のバントみたいすね」とかは言わない。（その比喩は内角を挟るスライダースみたいだねとか言ったことがあるけど、伝わってなかったのかな。）もちろん、日常会話と短歌作品と短歌の批評は違うのだ。

2023年の流行語大賞は「ARE（アレ）」だったし、2022年は「村神様」だった。まだまだこの国には野球の訴求力はあるのかもしれない。なのに、その比喩がダメというのは、つまりオジサン精神的用法が伝わっていないというだけのことかもしれない。